

水室

善界

危焦

石萬

私無憂

之清觀
長之世

明治四十三年四月三十日印刷

明治四十三年五月五日發行

訂正者、檢印
ナキモノハ偽版也

東京市麹町區中六番町二十九番地

訂正兼
發行者 丸 桂

東京市下谷區二長町壹番地

印刷者 嵐原錦三郎

東京市下谷區二長町壹番地

印刷所 凸版印刷株式會社

東京市麹町區中六番町廿九番地

發行所 觀古流改訂本刊行會

電話番町二五四四番



脇能

右

左

三月
ツキ

シテ
女神

北野神前女

早瀬弟
ミタケ

三人
ミト

四方
ヨコ

底山
モトヤマ

長
ヒロ

間
カナ

弓
ギム

職行
ナニガシ

其
ナニ

之
ナニ

落陽
ラクヨウ

の名
ノメイ

也
ナリ

強
カタ

あく
アク

一
イチ

見
ミル

往
カタマリ

都
シテ

都
シテ

都
シテ

都
シテ

都
シテ

都
シテ

又
キタ

か
カ

野
キタ

か
カ

馬
カ

場
カ

の元
カ

今
カ

を
カ

感
カ

あ
カ

感
カ

あ
カ

感
カ

感
カ

あ
カ

感
カ

あ
カ

感
カ

あ
カ

感
カ

あ
カ

感
カ

あ
カ

感
カ

あ
カ

感
カ

あ
カ

都よりゆきとおどる。
白い櫻の代りて。強いうる空。
あれや。春の後醍醐の山鐘く。
音るけよ。さて。唐躰のまの鐘もあ
く。却よゆきゆ波詠や。冰室山も
寒かゆり。
多かひはよ。丹
波の國冰室山の萬葉をひ。洪武久人

や。侍ち。冰室の、いわく。かみの。毒々。尋
ねぞやと。なじる。眞二声
まあらふ。陰や。元の。音。も。集もん。
深谷よ。立てる。松。音や。夕景。色。を。
強まゆ。立て。花。用。ぬれ。そ。
天下。清春。あひ。そ。ね。春。寂。の。色。
邊で。縁。よ。達。冰室。よ。た。お。ま。

置ます。窮の、窮じて、よほ、私室に、仕事。

詩文

卷之三

等

故人不以爲子也。子之不孝，無以爲子也。

氷室守^{ヒロモリ}ある
氷室^{ヒロミツ}

甲子

守り
モリ
井
アツ
水
ミズ
持
ササ

のわが信玄。おもひをせん
ザイショ

「ふるみの山のむねのなりたてしのとおの攝
へまう。春夏がて水の消えがれ、もれ
ぬく申て、昔古守の世ノ野よ一村の
森の下庵あらゆ。漁や水無日本ある
はなび。却寝て袂よひつて。かねば
六里の古事記。怪しうきひがゆ
ぎれど。アハの老翁雪氷や居のうち

まだへたう。の、前申もへ。がくは
家よ。満度^{セツ}。おもてらる。葉の度^{シキ}。あ。
翁^{オキナ}あくべりゆ。冰^{コブリ}を供^{シスリ}す
甲^{カニ}ト^{シテ}かくへ。と。冰^{コブリ}の。物^{モノ}の。体^{タガ}が。おまりて。の
の。在^{ザイ}。代^{ジタク}。まづ。聞^ヒけ。面白^{ハマク}。や。かく。冰^{コブリ}を。
かく。あ。と。の。の。在^{ザイ}。代^{ジタク}。まづ。聞^ヒけ。面白^{ハマク}。や。かく。冰^{コブリ}を。

徳子の声の音よ。その國鶴の歌
寒よ。供へ物の氷川わが。又
其後ひびの度も散り残え。續く。
またね。ねづみ。小山も冰室よ。
又此國よ。所を移して。深谷
も見え。奈良風。寒氣。但り。有
あらゆる。が。また長きの氷川

早朝

供給のため伊豆の國染田の郡より氷
室で貯め申もあり
の申も妙。さすがに寒氣も之達の。
日影もさへぬる室である。春夏まで
も雪氷の消えぬる所なり
所よりて氷の消えぬる所なり。房の
盛衰の如き似たる所せう事

や
水を刀。あらわがも。音
音水。供。力。あ。で。う。そ
う。雪。あ。ら。ん。
の。二。カ。す。み。音。と。も。つ。て。
萬。物。出。世。ゆ。き。地。の。恩。徳。な
り
會。圖。長。く。聲。帝。通。通。よ
感。あ。佛。會。來。生。ま。れ。て。は
サ

水室
夏の日よ。あつまて消えぬみどり。青
きつて。よがれて。らんりよめかふ
れや。萬物時よ。ありなむ。居の處れ。葉
色變へて。老の木。小葉。つぐわ葉
ぶの枝葉。さうのあたひの下。水
あ。

つむぎ度が氷室。庄もおひたるの。
ち影。よど。波。さげ。よわ。あづ。
か葉。ほせ。の。轟。よあ。あづ。
周。よ。雨。り。あ。て。桺。天。照。ま。氷。
の。お。わ。他。よ。黒。あ。る。持。け。わ。櫻。風。も。
そ。甚。お。翁。翁。と。年。い。お。き。る。至。唐。
ト。見。上。テ。ア。ル。ニ。二。ヤ。多。く。毎。う。
や。運。よ。カ。る。か。か。か。か。か。

初春の初雪はけよ。春は常。年は常。
からゆらぐ。初雪はけよ。春は常。
去年打まうて。残り残る。雪は常。
あも集めて。おひ下。氷は常。
ひて。氷は常。ね。積み。待ち元
ぬ。ひ。春は常。き。ま。夏は常。な。す。
ひ。ひ。氷は常。ま。ま。ま。